【 12 】

氏　　名　西村正秀（にしむら せいしゅう）
学位の種類　博　士（文　学）
学位記番号　文博第294号
学位授与の日付　平成16年11月24日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　文学研究科思想文化学専攻

学位論文題目　ジョン・ロックの観念説
——心，知覚，外界——

論文調査委員　（主査）教授 伊藤邦武　助教授 出口康夫　助教授 福谷　茂

論文内容の要旨

本論文は，17世紀イギリスの哲学者ジョン・ロックの「観念」にもとづく認識論が，知覚的認識を説明する理論として，どのような種類の理論であったのかを分析することを主題としている。この分析において主として扱われるテキストは主著の『人間知性論』であり，このテキストに見られる観念説の特徴を明らかにするために対比的に参照されるのは，同じく17世紀の認識論を代表するアルノーとマールブランシュの観念説である。また，ロックの「解釈」にかんして吟味されるのは，20世紀後半における代表的なロック論であり，とくに近年わが国において発表されてきたいくつかの独創的なロック解釈との対比のもとで，本論文の解釈の独自性，妥当性が主張されている。本論において検討される具体的な課題は，(1)ロックが論じた「感覚の観念」とは何であるのか，(2)心は観念を介して，どのように外界の知識を獲得できるのか，という根本的な問いに答えることであり，そのための論証は以下の5章によってなされている。

まず，第一章「ロックの認識論における心の概念」では，予備的考察として，ロックの認識論における心の概念の特異性が確認される。観念が「心的表象」である以上，課題(1)に答えるためには，予めロックのいう「心」の概念の内実を明らか異にしておくことが必要である。

ロックのいう心の概念は，存在論的には特性二元論として特徴づけられる。ロックは心の本性にかんする形而上学的考察を意図的に回避したが，その理由は認識論における彼の方法論にある。スコラ的な形而上学的思弁に不信感を抱いていたロックは，観察にもとづいて個別的事実のデータを集める「自然誌的方法」を，その認識論の中核に据えた。観察不可能な対象にかんする仮説的方法は，学問の進歩に貢献するなどの有用性があるかぎりで，限定的に使用が認められていた。それゆえ，実体の本性にかんする不可知論を唱えていたロックにとって，心の本性の仮説的説明を認めるか否かは，その仮説の有用性によって判断されることになるが，ロックによれば心の本性にかんする通常の哲学的仮説は，学問の進歩にいかなる貢献もしていない。

ここから，心の概念は自然誌的方法によって得られる観念によって規定されることになるが，その際にロックは，思考や意志などの随意性を特徴とする心の特性の観念は，延長や運動などの物理的特性によっては実現されないという思考実験をおこない，それらを物理的特性から還元不可能なしかたで区別した。そして，非物理的特性が観察される実体を，その本性とは無関係なしかたで，「心」と呼ぶことが提案された。したがって，ロックの認識論における心の概念は，特性二元論にもとづく「思考する実体」として再構成されるのである。

次に，第二章，第三章で，課題(1)にたいする解答が与えられる。

第二章では，感覚観念のもつ存在論的身分が明らかにされる。その分析の結論は，「感覚の観念は知覚作用とは区別された知覚対象である」，という標準的解釈が正しいというというものである。このことは，この標準的解釈と反対の立場を代表するジョン・ヨルトンの解釈を否定することによって示される。ヨルトンによれば，ロックの「観念」という概念につねに両義性や曖昧性の嫌疑がつきまとってきた理由は，その概念が知覚対象として誤解されてきた点に存している。この誤解

を解くために，ヨルトンはロックの観念説を，観念を知覚作用として規定するアルノーの観念説に類比的なものであるとして，この概念の意味を知覚作用と解する解釈を提出した。

しかしながら，アルノーとロックの理論を詳細に比較検討すれば，ヨルトンの解釈が成立しないことが明らかになる。たしかにアルノーの観念は知覚内容と存在論的に同一である知覚作用として規定されているが，ロックの観念は知覚作用と存在論的に区別された知覚内容として規定されている。両者の違いは，心が表象としての観念を獲得する過程にかんする説明方法の違いとして理解される。アルノーは，非物質的実体としての心がもつ能動的性格を強調するため，観念は受動的な知覚対象とは見なされず，表象機能を内在的に有する知覚作用として規定する。これにたいして，ロックは非物質的実体としての心の概念を採用しておらず，知覚における心の受動的性格を強調する。観念は外的対象からの因果的所産として位置づけられ，観念がもつ表象機能も外的対象との因果関係にもとづいて説明される。それにともなって，知覚作用が担う主たる役割は，所産として与えられた知覚内容としての観念を受け取ることに限定されるのである。

第三章では，感覚の観念の本性にかんするさらなる分節化がおこなわれる。前章で感覚の観念は知覚作用に相関する心的存在者であることが確認された。多くの標準的解釈者は，このような存在者の本性にかんして，それを可感的性質のみをもつ「心像」として理解してきた。しかしながら，富田恭彦が指摘するように，ロックは多くの場合，感覚の観念を単なる心像ではなく，三次元の外的対象として概念的に把握されたものとして説明している。この章では，富田の指摘を承認したうえで，概念的に把握された観念における「概念」の性質を分節化し，感覚の観念の本性にかんする考察を補完する。

概念的に把握された観念における「概念」とは，二つの要素から構成されており，その一つは抽象観念を指している。ロックのいう抽象観念とは，知覚における与件からそれを個別化する要素を思考のうえで分離したものであり，その本性において普遍的な，心的存在者である。この抽象観念は，知覚において心が個別的観念を識別し同定する際の，範型として機能している。概念のもう一つの意味は，知覚において観念間の相違を識別したり，状況に応じて言葉を適切に使用したりする心的能力である。これら二種類の「概念」は，相互依存的な関係に立っている。まず，抽象観念を獲得するためには，観念を識別し同定する能力が前提される。逆に，特定の観念を十全な仕方で同定する能力が獲得されるためには，その範型としての抽象観念が必要とされる。ただし，この相互依存関係は悪循環ではない。両者は，心に生得的に備わっている識別能力をもとにして，経験をつうじて通時的に発展していくものとして，理解されているのである。

次いで，第四章と第五章では，先の課題(2)にたいする解答が与えられる。

まず，第四章では，標準的解釈に帰せられる認識論的問題にかんして，これまで提出されてきた解決策が批判的に検討される。第二章の分析によって，ロックの観念説が，観念を知覚の直接的な対象と見なす，間接実在論としての知覚表象説であることが明らかになった。しかし，この間接実在論を採用すると，外的対象の存在はいかにして知られうるのか，という根本的な問題が生じる。そして，このようないわゆる「知覚のヴェール論」的問題にたいしては，大別すると二つの解決策が提出されてきた。一つは，(I)ロックの観念説が「心の内なる観念から外界へどのように到達すればよいのか」という問題関心を含むことを認めたうえで，外界への認識的アクセスを模索する解決策である。もう一つは，(II)ロックの観念説がこうした問題関心を含むことを否定して，外界の存在にかんする懐疑論を回避する解決策である。

だが，これらの解決策はいずれも「知覚のヴェール論」的問題を克服できない。というのも，まず(I)にかんしては，一旦知覚の直接的対象を心的な観念であると認めてしまえば，観念から独立のしかたで外界にたいする認識的アクセスを確保することはもはや不可能になる。そしてもしも外界にたいする観念から独立した認識的アクセスが確保されなければ，外界が認識されるという主張はすべて知覚のヴェールの内側でなされているものと見なされることになるのである。他方，(II)にかんしては，そもそもロックの観念説から「心の内側から外側へ」という問題関心を追放することができないことを注意する必要がある。たしかに，この問題関心，問題図式が否定されれば，「知覚のヴェール」という概念は成立しない。また，王立協会の実験主義的自然学に共感していたロックが，感覚の認識論的役割を重視し，外界の存在を疑っていなかったのは事実である。しかし，知覚の直接的対象である観念が心的内在として規定されている以上，ロックの観念説においては全ての認識が観念を介して行われていることになる。それゆえ，「感覚の観念が外的対象を表象している」という主張は，正当化されないことになるのである。

最後に，第五章では，前章の分析を踏まえて，ロックの観念説が懐疑論にたいしてとりうる正しい方策を検討し，それを

通じて彼の観念説を外界の存在にかんする知覚的信念の合理性を説明する理論として再構成する。

前章の分析によれば，ロックの観念説は「知覚のヴェール論」的問題を正面から論駁することはできないことが帰結する。しかし，このことからロックの観念説が外界の存在にかんする知覚的認識を説明しえないと結論することは，早計である。というのも，認識論における懐疑論が，信念の確実性を否定する「確実性懐疑論」と，信念の合理性に疑義を呈する「合理性懐疑論」に分けられるとすると，もしもロックの観念説が前者のみを受け入れて後者を拒否することができるとすれば，感覚の観念にもとづいて形成される外界の存在にかんする知覚的信念は，たしかにその真偽は究極的に証明されえないとしても，それが受け入れられるべき理由のあるものであることは，確保できるからである。

そして実際に，ロックの観念説は，このような知覚的信念の合理性を説明する理論として再構成されうる。ロックはその観念説が「知覚のヴェール論」的問題を論駁できないことを暗黙裡に認めたうえで，一種の超越論的議論によって，感覚的観念にもとづく信念の受容が合理的であることの根拠を示していた。それゆえ，たしかに外界は観念を介して間接的に知覚されるものであるとしても，その存在にかんする信念には合理性があることを認めることができるのである。

以上の議論から，本論の最初に掲げられた課題は次のように答えられることが結論される。すなわち，ロックの観念説は間接実在論としての知覚表象説であり，外界の存在にかんするわれわれの知覚的信念にかんして，その確実性ではなく合理性を証明することによって，「感覚的知識」としての認識論的身分を付与する理論である，と。

論文審査の結果の要旨

ジョン・ロックの『人間知性論』は，イギリス経験論の出発点を記す経験主義的認識論の祖であるという以上に，「観念」を分析の主題として人間の知識の「起源と範囲」を確定しようとする，西洋近代哲学全体のパラダイムを決定した著作として，非常に重要な意味をもっている。しかしながら，いわゆる近代哲学のパラダイムとしての「観念の途」を敷設したこの著作における観念の理論については，他方で，「観念」というこの概念の意味そのものに深刻な曖昧さがつきまとっていると同時に，認識論的にも克服不可能な困難，すなわち懐疑論への危険が最初から胚胎しているのではないか，という嫌疑が長いことかけられてきた。近年ロックにかんする独創的な解釈が，国の内外を問わず多くの論者によって発表されてきたが，その主たる理由は，こうしたロック哲学の歴史的な重要性と，その理論に内在する困難，混乱のギャップをどう埋めるのかという問題意識にあり，本論もまた最近のこのような諸解釈の問題関心に沿って，ロック哲学の整合的な解釈という挑戦に答えようとした，野心的な研究の一つである。

論者は本論において，ロックの観念説をめぐる解釈の基本的な課題として特に，(1)「感覚の観念」をどう理解するか，(2)この理解のもとで，いわゆる「知覚のヴェール論」として定式化される懐疑論的批判にたいしてどのような解答が可能であるか，という二つの課題が中心を占めるべきであるとするが，この課題設定はロックの観念説の急所を論じるために，もっとも適切な視点であろうと思われる。というのも，観念という概念の曖昧さがもっとも強く疑われるのはこの感覚的観念にかんしてであり，懐疑論の嫌疑が解消しうるかどうかも，この感覚の観念の解釈に大きく依存しているからである。論者はこのように設定された課題にたいして，本論全体の分析を通じて最終的に，(1)懐疑論を完全に回避するために，ロックの「観念」の意味を「知覚の作用」と解釈する近年の解釈は，ロックの同時代のアントワヌ・アルノーの観念説との比較によって，維持できないことが判明する，(2)観念の意味を従来の標準的な解釈に沿って「知覚の内容」と解するかぎり，ロックの理論は信念の「確実性」にかんする懐疑論を回避することはできないが，彼の自然誌的方法にもとづく認識論の企てにとっては，信念の「合理性」にかんする懐疑論を回避できるだけで十分である，という結論を下しているが，これらの結論も，今日のロック解釈としてもっともバランスのとれた，また認識論上の微妙な論点に極めて丁寧に気を配った，洗練された議論になっていると思われる。以下，このような結論にいたる論者の論述において，優れていると思われる点を列挙する。

㈠論者はまず，外界の対象にかんする感覚を通じた観念の獲得という主題をめぐる最近の解釈上の論争を取り上げ，これまでの伝統的な解釈である「知覚の内容」としての観念を否定して，これを「知覚の作用」と解釈しようとする最近の議論を再検討するが，そのために論者は，最近の解釈の主たる論拠となっているロックとアルノーの観念説の類似性，あるいは同形性という議論を細かく吟味している。論者はこの吟味を通じて，ロックとアルノーの観念説の間には確かにいくつかの共通点があるものの，知覚作用を能動的なものと見るか受動的なものと見るかという点にかんして決定的な相違があるため

に，ロックの観念説をアルノーのそれと同一視して解釈することは許されない，と結論している。この比較研究は，その歴史的意義にもかかわらず精密に読まれることの非常に少ないアルノーについての，周到な理解にもとづいて行なわれており，大きな価値のある哲学史的知見となっている。

㈡ロックの認識論の曖昧さの理由としては，観念という概念の意味の曖昧さとならんで，観念が心的対象と呼ばれるときのその「心」の意味が，はっきりしないという点がしばしば挙げられる。というのも，ロックはデカルト的な意味での「実体」としての心という考えを，実体一般の認識不可能性を理由に拒否しているために，認識論の背後にある存在論が明確ではないからである。論者はこの問題の重要性を認めたうえで，ロックの存在論を「特性二元論（property dualism)」と規定しているが，この解釈も最近の心の哲学の論点を援用して説得的に論証されており，ロック哲学の解釈として新しい，しかも有力な主張を提示できていると考えられる。

㈢ロックの観念説は，観念を介して外界の対象を間接的に知覚する，いわゆる間接的実在論の立場であることが，㈠によって結論されたが，このことを認めると，観念という「知覚のヴェール」の外側にある対象の存在にかんする信念には，懐疑論的批判がつきまとい，決してその信念の正当化ができないのではないかという問題が生じる。論者によれば，ロックはこの懐疑論の問題を十分に意識しつつ，認識論における懐疑論が信念の確実性と合理性の二点にかかわることを区別して，特に後者の懐疑論を拒否する一種の超越論的議論を用意していた，とされる。これはロックの認識論にたいして強力な擁護を与えるばかりでなく，その議論の構造に超越論的議論という新しい要素を見いだす独創的な解釈として，今後のロック研究の焦点となりうるような意義のある分析の成果である。

以上のように，本論は哲学史的に重要でありながらその整合的な解釈が決して容易ではないロックの認識論について，きわめて周到な用意のもとに新鮮で説得力のある解釈を提示した，魅力的な研究である。これは，過去の哲学理論におけるいくつかの曖昧さの存在が新たな解釈の必要を提起して，その結果哲学的思索の進展を促すという，幸福な事例のひとつといえよう。もちろん，ロックの観念の理論には，本論で扱われた「感覚の観念」以外にも，抽象観念の問題や，観念の記号性めぐる問題など，いくつかの複雑な問題がからんでおり，本論の解釈によってロックの認識論のすべてが解明されたわけではない。この点では，論者の今後のさらなる研鑽を望むところである。

以上審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお，2004年8月9日，調査委員3名が論文の内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。